

公衆衛生 書評

「日本の疫学—放射線の健康影響研究の歴史と教訓」(医療科学社)

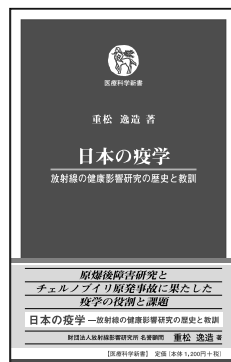
評者 多田羅浩三 放送大学「生活と福祉」専攻教授

わが国の疫学の育ての親である、重松逸造先生が、これまでの先生の放射線の健康影響に関する研究の軌跡とその成果をもとに、このたび歴史の記念碑ともいえる本を出版された。『日本の疫学—放射線の健康影響研究の歴史と教訓』である。

わが国は世界で唯一の原爆の被災国である。その被災の悲劇は、もちろん被爆の時点においてのみ見られたのではない。長く数十年にわたって、その傷跡は深く残され、今日にまで続いている。その記録は、人類が2度と起こしてはならない愚挙の足跡として、刻まれ、記され、人類の歴史に残されなければならない。

そして、その人間の身体に残された傷跡が、広島原爆影響研究所の科学的な信念と社会への責任感に満ちた、長年の尽力によって、記録され、管理され、分析されてきた。研究所の理事長として、その歩みを常に先頭に立って支え、指導されたのは、重松先生である。その実績をもとに、先生は国際原子力機関を舞台に、放射線の人体影響に関する研究において世界をリードされ、目覚ましい活躍をされた。一方、先生は、戦後のわが国の公衆衛生の向上と推進に終始尽力され、その間、わが国の公衆衛生、そして疫学を担う、優れた人材を多数育てられた。今日、わが国の公衆衛生の実績が、世界のどの国にも負けない水準にまで到達し得たのは、文字どおり先生

重松逸造・著：日本の疫学—放射線の健康影響研究の歴史と教訓。医療科学社 (TEL 03-3818-9821)、1,200円＋税



の積極的で意欲的なご指導によるものである。その先生が、「日本の疫学」のために本書を出版された。こんなにありがたいことはない。

本書では、疫学の基礎、放射線の健康影響評価、チェルノブイリ原発事故、くらしの中の疫学、原爆後障害研究、日本の疫学の歩みと展望などについて、わかりやすく、しかも格調高い文章で詳細に述べておられる。そして人類が忘れてはならない、極めて貴重な知見が、いくつも紹介されている。

先生は本書を、「21世紀における日本の疫学の歩みが、これからは特に若手疫学者諸氏の手により創造の精神で刻み込まれることを期待している」という言葉で終えておられる。先生の「疫学」の思想が若い研究者によって継承されて欲しい。そして、人々の健康を支える「日本の疫学」が、さらに大きな大樹に育って欲しい。さらに願わくば、研究者に限らず、唯一の原爆被災国である、わが国のすべての人たちに、この書を座右の書としていただきたい。